

板橋ゼミ卒業論文中間報告

1、 内山栞 『無常への試み－無常は如何にして克服され得ないのか－』

2、 取り組んだ問題

日本思想の一つである無常について論じる。無常は、2年次の「日本思想史」の期末レポート以来向き合ってきた問題である。卒業論文でも同様に無常を題材に扱いたいと常々思ってきた。だが、無常を扱うにあたっては、どう論じるかが問題となった。そこでふと、昨今の世の中の複雑さ、厳しさを取り上げ、そうした社会問題に無常という思想を引き付けるといふ論文形式が有効ではないかと考えた。具体的に、現代は無常であることを定義づけ、無常はどう抗っても、克服できないという方向性である。そうした世の中であるならば、どのように我々は生きていけばよいか、最終的に論じていきたい。

3、 2に取り組んだ方法（主に使用したテキストなど）

中世・近代文学研究家、思想家（本人の意向に沿って言うならば厳密には思索者）である唐木順三（1904-1980）の書物を扱う。

唐木順三 『唐木順三ライブラリーⅢ 中世の文学/無常』中央公論選書 2013年

同上 『唐木順三全集』第三巻 筑摩書房 1967年

同上 『唐木順三全集』第四巻 同上

主に、唐木の『無常』を使用し、必要に応じて『唐木順三全集』も扱っていかうと考えている。（社会問題を取り上げ、論じたりすることもあるため、唐木の著作以外も取り上げる予定である。）

なお、道元思想については、凡て唐木の著作『無常』での参照に依拠している。

4、 現在の目次・あらすじ

以下は、現段階での仮目次である。論文タイトルとともに今後変更になる可能性がある。

はじめに

第1章 このごろ思うこと

第1節 昨今の世の情勢に関して自身が思うこと

第2節 唐木の生きた時代と現代との比較

第2章 無常なる世の中

第1節 無常の概要

第3章 無常への試み

第1節 無常の分析

第2節 無常の克服

第3節 反論－無常は克服できない？

第4節 我々はどこへ向かうか（現代の処方箋として）

おわりに

5、本論

一、前期の振り返り

前期は主に唐木が生きた時代と現代の比較と、道元の思想について論じた。唐木は死の間際まで、原爆を生み出した科学者たちは、純粋な科学研究だけを目指すのではなく人類幸福との両立が可能かに（必然的に）思いを巡らせるべきである、という「科学者の社会的責任」について考えていた。論文「滅びの感覚」（1956年）では唐木が、現代の科学、技術の著しい進歩が実は我々の生活の破壊、果ては人類滅亡への進歩ではないかと憂えていたことが窺える。それから半世紀以上が経ち、社会の現状はどうなったであろうか。東日本大震災での原子力発電所の爆発事故を筆頭に、社会、世界情勢のさまざまな問題、昨今では国際問題としてウクライナ侵攻などがあり、複雑さが一層増している。現代におけるこうしたさまざまな問題を取り上げ、唐木の生きた時代、その時に執筆された唐木の文献と比較し、論じてきた。殊に、原子力の問題に至っては唐木が重要視してきたことから、最も注視し、また重点的に取り上げるべき事柄であると考えている。

また道元の思想について、厳密に言うとは前期の発表ではそこに至るまでの道元の生い立ち、思想の前提を述べた。従って、道元の思想を論じるまでには到達していない。本発表では、前期で論じてきたその前提を踏まえ、具体的に道元の思想について踏み込んで説明していく。

二、リアリティに面した道元—その色合い

ここからは、本題である道元の思想について唐木の視点をもとに切り込んでいく。それについては結論部である、文献の最終ページが端的に良く表現されていると思う。用語や詳細についてはそれ以後、触れていきたい。

生れる、死ぬる、咲く、散る、すべて「起」である。時節到来、時が熟して起る。そして「起時法起、滅時法滅」といわれる。ひとつの花が開くということも衆法合成によって初めてありうる。全宇宙が参加協力して、はじめて花は時を得て開く。花は衆法の合成である。衆法合成の仮の場が花というものの姿とあってよい。衆法合成で花は散る。法滅において花滅である。花は何等実体ではなく、合成、解体の仮の場にすぎない。然しこの仮の場がなければ、衆法は拡散したままで、法の起滅もない。従って法もない。

花は衆法合成の仮の場だから、まさに無常である。はかなくうつろうものである。しかし、その無常をおいてほかに花はありえない。ひとつの花がひらくにも全世界、全宇宙の協力がある。衆法の合成がある。無常なる花において宇宙の全力が集中的に表現せられている。花をそのような花として洞察しうるには、その洞察する者自身がまた衆法合成、法によって生滅するものであることを自覚していなければならない。つまりは、身心脱落者、自己執着の吾我を離れたものでなければならない。！

ここで唐木が花を具体例にして述べているのは、『正法眼蔵』第五十九『梅華』に基づいてのことである。

花が咲くというひとつの現象にとってみても、単に花それ自体の「行為」ではない。「花」という存在が衆法合成つまりは四大五蘊の合成する仮の場所だからである。その仮の場所において花が開き、やがて散る。「花」はあくまでも、衆法合成のための仮の場であり、実体ではない。

しかし、花という仮の場がなければ衆法合成はありえず、従って法の起滅、法はない。ちなみに法とは、端的に言うとは無常である。

以前の発表で『正法眼蔵』第九十三『道心』を取り上げた。そこでは唐木曰く「従来の無常観とは本質的に異なるもの」すなわち、吾我を捨て、心を無常にかけよということが記されている。その直前には「わがころをさきとせざれ。ほとけのとかせたまひたるのりをさきとすべし」とある。心を先とするのではなく、法（のり）を先とせよ、これはつまり心を無常にかけることであり、無常即法と言えよう。無常とは自他を含めての事実とされる。その事実を主観のこちら側がどうにかしようと思うのではなく、ただ委ね、無常に身を任せる。それが心を無常にかけることであり、吾我を離れること、ひいては道心を得るための第一の用心であった。

話を本題に戻すとして、「ひとつの花がひらくにも全世界、全宇宙の協力がいる」とあるように、花が咲くという現象はそれ独自のものではなく、全世界、全宇宙の力の集約の賜物なのである。そして花を衆法合成の仮の場、全宇宙の集中的表出だと覚知するには、その覚知する側が、己自身も花同様の存在、つまりは、衆法合成、全宇宙の集中的表現の場であることを覚知していなければならない。

道元の思想は、その前提に時間が本来無目的、非連続であり、無意味なことの無限の反復であることをこれまでの発表で述べた。時間の有意味化、装飾化を悉く否定し、その実相である刹那生滅、刹那生起というありのままの時間に相対することが通過すべき関門である。この刹那生滅の基本原理解は、『正法眼蔵』第三十一『海印三昧』に詳しく記されている。「我」は実体ではなく、衆法合成の仮の場である。四大（地・水・火・風）五蘊（色・受・想・行・識）の合成・解体が思いがけなく為された場所が「我」である。刹那生滅は単なる「我」の生滅ではない。そして刹那は、前刹那と後刹那が前後切断されていて、そこには因果関係がない、という特徴がある。だが、そもそも因果関係がないとすれば、どうやって刹那生滅、刹那生起の「起」が起るか。道元はこれを時節到来と言いつつ、時が円熟し、良い契機がやってくるという意味である。

(…)「時は起なり」といわれている。起は時節到来といわれている。(…)さらに『正法眼蔵』第十一『有時』には、「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」「時は飛去するとのみ解会すべからず、飛去は時の能とのみ学すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし」とある。

「時は起なり」という一面と、「時は有なり」という一面と、その二つがかさなり合うところに、「而今」という道元独特の言葉が出てくる。過現未という飛来飛去の一点としての現在が、幅をもってることが「而今」の今である。ここで時間は空間と交わる。時間の無が存在の有と結びつく。無常が常と交錯する。結びつき、交錯しながら経歴する。²

時は、一義的なものではない。「一切をつらぬきながら、その正体を客体的にはつかめない」³刹那生滅としての「時は起なり」の起と、空間的な存在であり「尽界尽有をつくしつむ」⁴有とが「而今」という時において交わる。山という存在もそういったことで前後裁断、刹那生滅、刹那生起である。「山は飛去の時によって切断されて非連続でありながら、山としてつながっている」⁵。山は瞬間瞬間、刹那生滅であるからに切断されている。そうした点で非連続でありながら、「時は有なり」で連なる。それは、過去、現在、未来が一見、時間的一直線ながらも、その中心点である現在が、過去、未来をも集約した不動的時間という特徴を持つからである。それゆえ、非連続的ながらも、山は山として自己同一性を保つことができる。

ところで、（前ページの「思いがけなく」も相まって）時節到来は偶然的なものなのか。唐木は『正法眼蔵』の第二十九『恁麼』を取り上げている。「いはゆる恁麼事をえんとおもふは、

すべからくこれ恁麼人なるべし」⁶。恁麼とは「かくの如く」という意味のほかに「そのまま」「ありのまま」という意味も持つ。（恁麼は「かくの如く」という意味から、「このような」としか表現できず、それ以上に言い表すことのできないという意味も含む）。すなわち自然法爾である。これまで論じたように、道心者になるためにはその第一条件として、無常を觀じ、心を無常にかけることが必要であった。また、それに至るには、思慮分別の「慮知心」つまりは生死事大の道理を知ることが必要であり、それによって、菩提心を発することができる。この菩提心とは『正法眼蔵』第七十『発菩提心』より、個々人の菩提を求める心ではなく、個人に内在する心を超えたものであるとしている。つまり、個人や我として限定することができないことを恁麼と言ひ、その心が菩提心ということである。これをまた仏性とも言い得る。

論義を重ねるが、刹那生起、刹那生滅、つまりは刹那流転を重ねる個人がなぜ、そうして個人の心を超えたものを求めることが可能とされるのか。これに答えるに、唐木はこのように言っている。「ただ刹那流転の無常人が「恁麼人」になろうとする道心、発菩提心によってのみ、恁麼になりうる」⁷と。恁麼になるためには、「正師」すなわち恁麼を体得した「得道」の人と出会い、そこから学び、自分自身が「正師」になることが必要である。

こうしたいわば、師匠に会うのは「感応道交」によると道元は言う。時節到来と同義で、感応道交は自然的、因果的なものでない。「発心する者の発心の機が、まさに時を得て、個我を超えたものに逢着する」⁸。二つのものが時季的に合わさりあう。「仏言、欲知仏性義、当觀時節因縁、時節若至、仏性現前」⁹、この「欲知仏性義」の知は「知る」「行ずる」ということと「知ろう」「行じろう」と欲することの合わさり、また「知る」「行ずる」ことは、時節の因縁、さらにそれを欲することも時節の因縁によって生じるものとされる。

加えて、唐木は「時節若至」について、「すでに時節は至っていて、そこに何等疑いはない」という読みをしている。これに即すると、「当觀時節因縁」つまり時節因縁を觀じている際にはすでに、時節は至っている。しかも、觀ずるは単なる主客の觀でも、自他の觀でもない、そのままに時節到来が現れることの觀であるとしている。従って、知ること、知ろうと欲する際には、すでに因縁があり、時節に乘じ切っているのだという。

結論として、時節到来、感応道交は、単なる偶然性、あるいは唐木の言葉を借りれば僥倖的なものではない。偶然を偶然としてそのままに乗ずること、時節到来三昧に乘じ切ってしまうと、もはや偶然を超え出たものとなる。このような事態を「正当恁麼時」即ち「恁麼時の而今」の時節と言ひ表す。これに即すると、春が到来することと花が開くことは偶然事を極め尽くした時節到来三昧なのである。

道元は『仏性』にて、「無常は仏性なり」という論理展開をした。通常の見解は、無常と常とを区別し、存在する凡てのもの、現象は変化して無常であるが、仏性は本質的であるから不変常住であるという考え方である。しかし、無常と常、色と空、現象と本質、相と性といったものを相容れない二つのもとして、対立的に考える二元論的発想を、道元の禅は取らない。また、『御聴書抄』曰く、一般的に聖人凡人、釈尊（の説法）、衆生凡て無常ではないものではなく、仏性は一切固定不変の「未転」ではない。歴史的変転において凡てがあるのであり、転じない仏性はないため、「無常は仏性なり」と言った六祖を踏まえ道元は、人間も山河も歴史的な顛れであり、従って無常であるという立場をとった。

『正法眼蔵』第五十四『法性』において、道元は馬祖の次のような言葉を引いている。「[唐木の書き下し文で]一切衆生は、無量劫よりこのかた、法性三昧を出でず。とこしなへに法性三昧の中に在りて、著衣喫飯し、言談祇対し、六根の運用、一切の施為、尽く是れ法性なり」¹⁰。仏性と法性は同義である。花が開くことも、生死も、盛衰も、飛花落葉も凡て法性、従って無常これ法

性、翻って生死これ涅槃にもなる。身心脱落においてはこのようになる。この身心脱落を仕切ったところを脱落底という。

道元の言葉を唐木が解釈するに、馬祖の法性は、法性道の法性であり、法性三昧、すなわち法性に乗じ切っている。衣服をまとうことも、食事をする 것도全ては法性でそうではないものはない。やることなすこと全てが法性の働きによるものつまりは恁麼事であるとすれば、それを行う側も、即ち馬祖自身も恁麼人であると言えよう。そして恁麼人つまりは悟れる人物であることは身心脱落者であるということにもなる。したがって、生死をはじめとして凡て仏に任せるということは、我が全くの受け身であり、我が法に転じることであるが、法が法に転じると言っても良い。

馬祖も茶も飯も、ともに法性三昧のうちにあつて、法性が法性を転じているというのである。飛花落葉もこれ法性三昧のうち、生死無常もまた三昧のうちというのである。ここにいわば脱落底の共同態が生れる。馬祖の身心脱落において茶飯脱落、山河大地脱落、人は山に会い、山は人に会う。

(…) ここにいたって、無色無味の時間が莊嚴せられる。無意味なことの反覆であつた虚無の時間が莊嚴光明の時間になる。(…) ニヒルがリアリティとなるわけである。無量劫よりこのかた、法性三昧のうちに、時間は去来している。一切衆生、森羅万象、法性の働きでないものはない。無常な時間、転変の歴史が、そのままに法性の働きである。生死の無常、世間の無常、これもまた法性のうちということになろう。11

凡ては法性三昧であり、もはや法性が法性を転じていると言えよう。物事の移り変わりすなわち、飛花落葉、無常も法性の三昧のうちである。その三昧において、無意味なことの時間の反復つまりは虚無的時間が、実物そのままとして、ありありとする。

道元は法性三昧、つまりは無常の無常性を徹底して極め尽くした。無常という言葉がどのようなかを、身心脱落、法性三昧によってその極地に達したのであつた。以上のことから「無常を最も能く会得した」と唐木が評したのである。

三、つまりはどういうことか

前節では、道元の無常の会得、その構造について唐木の『無常』をもとに説明した。理解し難い点多々あるため、本節ではそれを可能な限り簡潔かつ明瞭に論じたい。

つまるところ、心を無常にかけて、物事をきわめ尽くすことで、それ自体がもはや何等意味(解釈)を持たないものとなり、事実そのままとなること、つまりは「万物は流転し、永遠普遍のものはない」という無常を徹底追究し、事実それ自体がありありと面前に浮かんでくるということ、これが道元の会得した無常、そして無常の無常性を徹底したということである。それは、一途な行持(修行)と、弛みない思索の賜物であつたと言えよう。

刹那生滅、刹那生起が時間本来の姿であり、一刹那一刹那生じては滅する。そして前刹那と後刹那の因果関係は認められない。そうでありながらも、例えば、山は山として同一性を保つ。その根拠は何か。それは、刹那が「今」という現在(という時間)の一点であり、不動の事実であるからである(いくら時間が経つとしても、確かに「今」という時間が存在するのは紛れもない事実であろう)。しかも、「今」という現在は過去、未来が集約されている。「今」があることはまた過去があつて、未来があるだろうことを裏打ちする。時間は刹那生滅でありつつ、「今」は紛れもない存在であり、その存在が過去、未来の存在を証明するという二つの側面を持つ。時間の本来性とは、この二つの時間が交錯することである。

以上の理論は人間にも当てはまる。人間は元来、無常人である。道元は禅道を通してそうした無常人から恁麼人、つまりは悟った人物となる。この過程には師匠が必要でありそれは感応道交、時節到来によって可能であることを論じた。このことも含めて、物と物が出会うのは偶然的なものではない。その内実は「欲知仏性義」、すなわち行（知ること）とそれを欲することの合わせり。この同時契合が時節到来である。時節に乗りきってしまうともはや偶然事ではないのである。

時節に乗りきるとは一体どういったことか。それは「心を無常にかける」こと、すなわち我が全く受け身となって、無常と一体になることである。我が法（無常）に転じる、翻って法が法に転ずることにもなる。そうした者がやることなすことは凡て法となる。食事をすることも、衣服を纏うことも、凡て法性となる。従って法性三昧となる。法性が法性に転じているのである。

凡てが法性であることは、一切が無常でありながらも無常としての意味をなさないこととなる。それは、無常でさえも法性であること、そしてその法性が、時間本来のありよう、すなわち何等意味解釈を持つことなく、そのままとして存在を透過しているからである。

道元は以上のように、時間そのものに相對し、時節に乗りきった。そして万物凡て法性という境地に達することとなる。ここから結論づけるに、道元が到達したのは、無常に身を預けつつ、ひたすらに修行をすることで、一切凡てのものが法性となる、いわば無常の意味存在の無力化である。これがまさに、無常の無常性を徹底する、ということであった。

四、今回の発表が今後どのように生きるか

今回論じたことは、道元の無常の会得、つまりは無常を極め尽くし、無常の無常性を徹底するまでの過程についてであった。これを踏まえ卒業論文では、現代に蔓延る無常、またそれに通ずるニヒリズムを克服せずとも、何か別の方法である種やり過ごすという考え方をいわば「現代の処方箋」として提示する。その方針が、今回示した道元の思想において見出すことができるのではないかと考えている。我が法に転じ、法が法を転じるということ。それは一見受け身の姿勢であるが、一切を透過するというその受動性のうちに無常、ニヒリズムを超える道があることを唐木は示唆していた¹²。その正当性を身を以て証明することが論文執筆の最終的な目標である。

五、反省

今回の課題として、唐木の『無常』の内容をまとめることに固執してしまった点がある。もちろん最終的に「現代の処方箋」を論じるために、その下地となる『無常』の内容理解と道元の思想を説明するという点では間違っていない。しかし本来であればもう少し自分の言葉で論じるべきではなかったかと思う。また法（のり）が無常であることについて、前期の発表で説明はしているが、その時の発表同様、今回についても明確な説明には到達していない。無常即法、「心にかけられた無常」とは別の「無常そのもの、我をも、心をも、そのうちにふくんでいる無常」¹³が法であると唐木は述べているが、まだ十全な理解が及んでいない状況である。

そして、今回論じた道元の法性三昧をもとに現代の無常、それに付随するニヒリズムへの「打開策」として展開していく予定であるが、そもそも現代人、つまりは無常人である我々がどうやって法性三昧に達するかという問題がある。引き続き道元の思想への内容理解をすると共に、これも以降考えるべき問題である。その他、数多露呈した不十分な点、具体的に、説明が足りない、まだ取り上げるべき箇所を取り上げていないという反省点を、これからの無常への「試み」に活かしたい。

以上

卷末注

- 1 唐木順三『無常』より「無常の形而上学－道元」（1964年）532頁～533頁
- 2 同書 502頁～503頁
- 3 同書 503頁
- 4 同上
- 5 同上
- 6 同書 505頁
- 7 同書 508頁
- 8 同上
- 9 同上
- 10 同書 514頁
- 11 同書 515頁
- 12 唐木順三『唐木順三全集 第三卷』より「現代史への試み」（1949年）の「十四 新しい幸福論のために」315頁
- 13 唐木順三『無常』より「無常の形而上学－道元」（1964年） 493頁